

〔資料〕

## 近江商人の妻の役割

高 木 直 人

名古屋学院大学商学部

### 要 旨

一般的に、近江商人の近江とは、明治までの滋賀県のよび名である。日本で商人が活動をするための基盤を作ったのは戦国武将であるとも言われている。特に、近江の湖東地区（安土城周辺）は、織田信長の楽市楽座が商人の活動を発展させたと考えられている。

しかし、今回は、近江商人に関する商いではなく、少し違った角度からの近江商人について調べてみた。特に、近江商人の中でも、本稿では、湖東商人に含まれている五箇荘商人を取り上げている。五箇荘商人は、近江商人の中でも教育環境という観点からみると、かなり恵まれており、女子教育においても先進的であった。

そこで、本稿では、今回の資料の関係から、テーマは、近江商人の妻の役割としているが、主に五箇荘商人の妻の役割について考察している。

キーワード：寺子屋、丁稚、女子教育、ビジネスパートナー

## The role of the Omi merchant's wife

Naohito TAKAGI

Faculty of Commerce  
Nagoya Gakuin University

## 1. 緒言

近江商人のイメージに関しては、「近江泥棒」とか「近江商人の通った後には草も生えない」などと、あまりよくないイメージを持たれている人もいるかしのれない。また、時代劇でも、悪党商人として現れ、「おぬしも悪やの近江屋」などと、商売に関してはあまり良いイメージを持たれていないかしのれない。

しかし、近江商人は、そんなに悪い商いをしていた商人ではない。どちらかという、近江商人は勤勉であったといわれている。また、経営コンサルトを行っている方々も、最近では、「三方よし」という、近江商人の活動理念をよく紹介している。

「三方よし」をわかりやすく説明するために、「買い手よし、売り手よし、世間よし」という表現が使われている。それは、信頼を得るためには、売り手と買い手がともに満足でき、さらに社会貢献もできるのが良い商売であるとの考え方である。

近江商人は、商いで貯まった利益を、学校の建設や橋の建設に無償で提供し、社会貢献にも大きく貢献している。よく知られている事例は、古川鉄治郎（丸紅商店専務取締役などを歴任）によって、ヴォーリズ建築事務所の設計による、当時としては画期的な近代的校舎を擁する豊郷村小学校を寄付したことであろう。その校舎には、当時としては珍しい、階段の手摺には、「うさぎ」と「かめ」をモチーフとしたブロンズ装飾が施されている。

また、「三方よし」は、ある意味で考えると、松下幸之助の「水道哲学」に近い部分もある。ただ、「三方よし」は、元滋賀大学教授で近江商人研究家の小倉栄一郎の造語であるといわれているが、近江商人の活動理念とは大きくかけ離れていない。

現在でも、近江商人の商いに関しては、いろいろな研究がなされ、素晴らしい研究報告がなされている。また、近江商人の「三方よし」を、千葉商科大学では、2018年11月29日に日刊工業新聞社と共同で「第1回わが社のSDGs勉強会」を開催している。その場で、千葉商科大学の原科幸彦学長は、国連の提唱する持続可能な開発目標のSDGsについて「商人の“三方よし”の考えのようなもの」と説明されている。そこで、SDGsは海外から発信されたものだが、日本になじむものだとよびかけられている。そのような意味からも、近江商人研究は今後ますます、いろいろな視点で研究が行われると考えられる。

そこで、本稿では、近江商人を題材として制作された映画である「てんびんの詩」のモデルの舞台となった五箇荘商人にスポットをあてた。すでに、テレビでも放映されたことがあり、内容はよく知られているであろう。ただし、今回は、その映画の主人公（近藤大策）ではなく、母親に焦点をあて、五箇荘商人の妻の役割について考察している。

## 2. 近江商人の特徴

まずは、近江商人の特徴について簡単にまとめておきたい。近江商人は、他の商人との違いとして、一般的に2点があげられている。

## 近江商人の妻の役割

第1点として、近江で商いを行う商人ではなく、近江を本宅・本店とし、他国へ商いをした商人とされている。そこで、働く人々は、すべて近江の出身者であり、地元からの採用である。この、近江の出身者から人材を採用していたことが、近江商人の強みであったことには間違いがない。それは、本宅・本家において、しっかりとした人材教育と育成がなされていたからである。

第2点として、近江商人は「高島商人」「八幡商人」「日野商人」「湖東商人（五箇荘商人）」などとよばれる商人が存在し、それぞれ特定の地域から発祥し、活躍した場所や取り扱う商品にもさまざまな違いがある。近江の国は、琵琶湖が真ん中に位置し、「湖北」「湖西」「湖東」「湖南」に分けられている。ほかの県との違いが、この琵琶湖の存在によって生まれているのであろう。近江の出身であることから、近江商人とまとめられているが、それぞれが異なった商いを行っていたとしても納得できる。

また、近江商人の本宅は、決して派手な建物ではなく、見えない部分に贅沢を施しているともいえる。五箇荘商人が活躍していた、本宅がある場所は、特に都会という場所ではない。どちらかという



図-1 白壁と舟板塀の蔵・屋敷 筆者撮影



図-2 優雅な庭園 近江商人屋敷より 筆者撮影



図-3 本宅の外見 近江商人屋敷より 筆者撮影

と、田舎であるが、図-1の白壁と舟板塀の蔵・屋敷や、図-2の優雅な庭園などを見ることもできる。

ただし、この庭園は、本宅に入って初めて、その素晴らしい庭園を見ることができる。

図-3の本宅の外見からもうかがえるように、近江商人は派手な生活をしていた商人ではなく、コツコツと商いを行ってきた商人でもありながら、巨額の富を築いた商人でもある。今回は、近江商人の中でも、五箇荘商人を取り上げている。

### 3. 五箇荘地区と教育環境

五箇荘商人を輩出した五箇荘地区は、当時としては、予想以上に教育環境が整っていたといわれている。その一例として、五箇荘地区の寺子屋<sup>1)</sup>の存在である。

寺子屋は、全国的にみてふつう短期間で途絶えてしまうことが多いとされていたが、五箇荘地区では長期間にわたって継続されている。また、五箇荘地区の人々が寺子屋を支えており、その教育に対する熱意の高さがうかがえる部分も多い。五箇荘地区の寺子屋での一校当たり平均寺子数が110人と、全国平均の60人に比べてかなり高いこともその一つである。

そして、最も重要なことが、女子の比率も五箇荘地区が35%、全国が20%と全国平均よりも高いことである。このことが、近江（滋賀県）では、いち早く女子教育が五箇荘地区で展開された理由の一つと考えられる。

また、学校がなかった江戸時代はというと、店へ年季奉公に出すというのが最高の教育方法であり、村の子どもの多くが丁稚に出されていた。そして、店としては、丁稚を一度受入れたからには、一人前の商人に鍛え上げるのが店主の責任とされていた。現在で考えると、小学校・中学校・高等学校の12年間を店で商人として活躍できるように鍛えられていたとも考えられる。

すなわち、丁稚時代は従業員養成の期間であるが、教養もしっかりと学んでいた。その期間を終えると、担当業務を替わりながら、手代から番頭に昇格し、主人から家名と財産を分与されて別家となる。分家してからも本家との主従関係は続くという師弟関係が保たれていた。

また、五箇荘地区には、明治時代には、実践教育に重点をおいた、近代教育として、すぐれた商人を養成（設立の目的は近江商人の養成）するための学校が存在している。それは、五箇荘商人の藤井善助などが中心となり巨額な寄付を行い、明治40年5月に神崎実業学校を開校している。この学校の目的は、あくまでも商人を育成するために作られた学校である。

さらに、明治43年2月に校名を神崎商業学校と改め、昭和23年3月をもって教育活動に幕を下ろしている。現在は、滋賀県立八日市高等学校と八日市南高等学校として開校している。

ほかに滋賀県では、近江商人の土官学校とよばれた八幡商業学校がある。現在は、滋賀県立八幡商業高校として存在し、この八幡商業学校は、明治19年に開校されている。

それ以外に興味深いのが、大正時代に五箇荘地区に作られた女子実務学校での教育である。その学校については、次節で少し説明しておきたい。

#### 4. 女子教育の誕生と塚本さと

江戸時代以前の女性は、家庭での妻や母としての役割が求められており、そもそも学問は不要と考えられていた。しかし、明治時代になると、徐々に女子に対する教育が理解されだし広まりだしている。

女子教育が本格的に始まりだしたのは、全国的に見ると明治時代から始まっている。しかし、少なくとも、大都市ではない、近江の日野地区<sup>2)</sup>や五箇荘地区で、女子教育が生まれたことは、ある意味で珍しい現象であると考えられる。

五箇荘地区の寺子屋に参加していた、女子の比率が全国の比率より高かったことが、五箇荘地区で、私立の女子実務学校が設立された一つの理由であることには間違いではないであろう。ただし、塚本さと<sup>3)</sup>が開校した学校はもっと違った狙いがあったのではないかと考えることもできる。その部分に関しては、今後の課題としておきたい。

五箇荘地区では、女子教育の普及・改善を目的に、大正8年1月に塚本さとが77歳の時に、私財を投じて私立淡海女子実務学校を開校している。この学校は、塚本さとが初代校長となり女子教育のために残りの生涯をささげるように全力を傾けている。

また、大正14年には、当時歌人として著名で、女子教育界の第一人者として知られた下田歌子（後の実践女子大学の創設）が第2代校長となる。その当時、下田歌子は、その他の女学校の経営にも参加している。塚本さととは、和歌を通して下田歌子と知り合いであったとされている。その当時に、下田歌子が学校経営に参加した理由は、私立淡海女子実務学校の経営が厳しかったことから、その経営の立て直しのために参加していたようである。

ではなぜ、塚本さととは、私財を投げ出してまで、五箇荘の地で女子教育の普及を行ったのかである。そもそも、塚本さととは、五箇荘町川並の五箇荘商人の家に生まれている。子どものころは、おとなしい商家の娘というよりは、かなりおてんばであったと言われている。そして、芯がしっかりとしている娘でもあったようである。その塚本さとの性格が、学校を開校することに繋がっているかもしれない。ある意味、日本女子大学を設立した広岡浅子と似ている部分がある。

文久3年に、塚本さととは、父の定悦に見込まれていた、当時店で働いていた原三と結婚し、五箇荘商人の妻として、母として家を守っていた。その一方で、明治23年に息子の妻のためにと、年中行事、お総菜の作り方、家事の心得、農作業から、家具・衣類の手入れまで具体的に記された『姑の餞別』という家政の手引き書をまとめている。この『姑の餞別』を書きまとめていることから、大切なことを人に伝えたいという気持ちから作成したと考えられる。

『姑の餞別』は、家政の手引きとして書かれたものであることには、間違いがないであろうが、塚本さとが考えていた、五箇荘商人の妻の役割を息子の源三郎の妻に伝えたものである。本来は、もっと広い意味で五箇荘商人の妻の役割を伝えたかったのではないであろうか。

息子の源三郎の妻である塚本はなは、ものの言い方から立ち振る舞いまで、塚本さとの若いこと瓜二つで実の母と娘のようであるといわれていた。そのようなことから、塚本さとにとっては、『姑の餞別』は予想以上に、商人の妻の手引書としての意味があったのであろう。

なお、『姑の餞別』は、昭和6年（1931年）淡海女子実務学校後身の淡海高等女学校から刊行され、近隣の多くの女子に読み継がれたといわれている。

また、塚本さとは、子どもたちから手が少しはなれた、45歳ころから和歌を始めている。しかし、世間では、まだ女子には学問はいらぬという思想が一般的であったようである。そのような状況でも、塚本さとは、和歌を行っている。

このころに、和歌の添削をお願いしたことがきっかけで、下田歌子と出会っている。ただ、本格的に教育について関心を持ったのは、塚本さとはが70歳ころからである。そのころから、教育関係や財界関係者と広く交流を始めだしている。そして、塚本さとは、女学校開校のために本格的に研究を始め、多くの研究者の門をたたいている。特に、下田歌子や嘉悦孝子（東京女子商業学校校長）などと女学校の開校について相談し、私立淡海女子実学校の開校している。

ただ、女子教育を行うのではなく、五箇荘商人の妻として必要な役割を教えたいという気持ちから、私立淡海女子実務学校を創立したのではないかと筆者は考えている。

その当時の五箇荘商人の妻は、家政だけを任されていたのではなく、店の主人のビジネスパートナー的な役割も担っていたからである。

## 5. 近江商人の妻の役割

特に、近江商人の留守をあずかる本宅の妻たちの存在は大きかった。その近江商人の妻たちの役割が、商人の活力の源になっていた。すなわち、近江商人の妻は、素晴らしいビジネスパートナーであったという側面が考えられる。

まさしく、近江商人は、その商いの規模が大きくなると、関東や東北などに出店しているが、それは、現在でいう、単身赴任のようなものである。家族とは、別々に暮らす別居生活を行っており、本宅はあくまで出身地の近江におくという商いの方法であった。

一般的なイメージとされている妻の役割は、旦那が留守の場合は、ただ子どもを育て、旦那が帰ってくるのを辛抱強く待つといったものであろう。当然、留守の本宅は、妻が留守番をしているが、ただ、この妻の留守番こそが、近江商人の商いには重要であったと思われる。主人が留守のあいだ、妻が本宅を守ることを主な役割とし、さらに妻には、雇用（採用）と人材教育といったビジネスパートナーとしての役割があった。

近江商人の多くは、出店した地域では雇用（採用）することがなかった。店員の多くは、近江出身者に限られ、この伝統は、戦後まで続いていたようである。近江商人が創業した関東系の企業も当時は近江の出身者が大半を占めていたようである。

本宅の妻が、全国の出店先に送り出される丁稚の教育や躰の面倒を担当していたのである。本宅の妻が、10歳くらいの丁稚見習いの採用面接を行い、しばらくのあいだ、読み書きそろばんを教えている。そのかわり、使い走りや子守、掃除などをさせ、この雑務などから、丁稚の性格や才能の適格性を見極めていた。すなわち、丁稚見習いへの教育（現在であれば店員教育）も近江商人の妻としての役割であったのである。

また、本宅の妻の眼鏡にかなった丁稚見習いを、それぞれの才能に適した店に配属するという仕事も任されている。

本宅の妻は、丁稚見習いは、年齢的にも幼少期後半であり、この幼少期後半にあたる母親の影響は非常に大切であることを知っていたからこそ、あずかった丁稚見習いの健康管理のほか読み書きそろばんに代表される知育はもちろん重要であると知っていた。

それ以上に、丁稚見習いの期間に、店内や世間でも通用する道徳と、将来、商人として活躍できるために必要とされる基礎能力を教育している。すなわち、本宅の妻から、丁稚見習いたちは、商人として必要な人間教育を受けていたのである。

人材を大切にしていたと考えられる理由として、採用された丁稚志願者は店の主人の妻が一手に教育を行い、奉公人の結婚の世話も行っている。現在であれば、結婚の世話はおせっかいといわれるかもしれないが、その当時にとっては、重要なことであったようである。

また、一般的に丁稚奉公部屋は、あまり良いイメージでないように思っているかもしれない。しかし、実は、粗末なものではなく、奉公人は大切に扱われていたといわれている。当時、丁稚奉公は、その店にとっては宝物であったのである。

すなわち、近江商人の妻は、単なる人の妻や子どもの母親というだけでなく、ビジネスパートナーという側面が強かったことがうかがえる。

近江商人が活躍できた理由は、妻のビジネスパートナーとして、店に必要な人材育成に成功していたからであろう。現在では、丁稚奉公からの人材育成は不可能であることから、近江商人の商いは昔のように行えていないのであろう。

また、現在問題となってきた後継者の問題も、近江商人が活躍していた時代であれば、それほど問題として生まれなかった理由が少し理解できる。

## 6. 近江商人の妻になるために

一般的に、近江商人の妻となっている人たちは、寺子屋への入門から汐踏み（しおふみ）商家での行儀見習い奉公・上女中を経て近江商人の妻となっている。そこには、「のれん」を守り、商家の精神的な支えとなる女性としての教育が行われていた。

汐踏み（しおふみ）とは、上（かみ）女中として行儀見習いに奉公にあがる若い娘のことを「汐踏み」という。一般的に「辛い目を見る」という意味の「塩を踏む」から来ているよび名である。

豪商の家には、文人や茶道華道の大家などさまざまな文化人が逗留することも多く、図-4の貴重な蔵書も揃っている。



図-4 貴重な蔵書 近江商人屋敷より 筆者撮影

良家の子女は、汐踏みとして大店（おおだな）に奉公にあがり、単に労働するためだけでなく、むしろ商家の娘なりの実地教育としての意味が強かった。

汐踏み奉公にあがり、すぐれた娘たちが、妻として内助の功を発揮し、近江商人の目覚ましい成長の一翼を担っている。

すなわち、近江商人の妻になるために必要な実施教育は、この時代から汐踏みとして体験していたことがうかがえた。なんの努力もせずに、近江商人の妻とはなっていない。当時から、このような実施教育が行われていたからこそ、主人に信用される家庭を守る妻でありながら、ビジネスパートナーとしての妻の存在があるのであろう。

## 7. 結言

本稿においては、特に近江商人の活動についての新しい発見があったわけではない。どちらかという、重要であるポイントをまとめた原稿である。ただし、近江商人が活躍できた大きな理由として、近江商人の妻の活躍があったことには間違いない。そこには、妻のビジネスパートナーとしての役割があったからこそ、素晴らしい後継者が育成できたという事実が存在している。

また、近江商人が、地元から人材採用することにこだわっていた理由が少し理解できた。地元からの人材採用の本当のねらいが、近江の国から近江商人としての素養を持った人材を育成することにあったからである。

すなわち、近江商人として活躍できる人材を採用し育成するためには、本宅のあった近江の国でなければならなかったのである。そして、そこには、主人に代わって人材育成ができる、最も信頼のあるビジネスパートナーとしての妻の存在があったからこそ、近江商人が日本各地で活躍できたのであろう。



## 謝辞

近江商人の原稿を書きながら、岡田千尋先生と出会ったころのことが鮮明に頭に浮かんだ。岡田先生とは1985年4月に滋賀県の彦根市にある学校で、私が学生のころに出会った。岡田先生もまだ30代と若かった。そこで、岡田先生の商学総論を受講し、私が今まで学んできた科目とはまったく異なった面白さを感じた。ここで、商業論に出会い、私の人生を大きく変えたといっても過言ではない。ただ、現在は、商業論ではなく経営学を専攻しています。

その当時は、岡田先生はタバコが好きで、話をしている時には、キャビンをよく吸われていた。しかし、私が名古屋学院大学で勤務することになった時には、もうキャビンを吸われている姿を見ることはなかった。

1987年4月に、私が大学に編入した話をする機会があって、そこから約3年間、毎週土曜日の2時間目の講義が終わった後に、岡田先生はお忙しいのに関わらず、学校の近くの喫茶店で珈琲を飲みながら、私にいろいろな話を1時間半程度してくれた。不思議なことに、岡田先生は、いつもストロング珈琲を注文し、私はマイルド珈琲を注文していた。これをきっかけに、私も珈琲をブラックで飲むようになった。

私が大学3年生の時、岡田先生の誘いで、1987年11月に、人生で初めて学会に参加することができた。その学会が、日本流通学会であった。当時は当然学会員でもなく、学会運営の協力学生として参加させてもらったと記憶している。そして、その学会で、岡田先生が、私が本で名前を知っている先生方を数人紹介して下さった。この時は、尊敬する素晴らしい先生と出会えたことに、岡田先生には大変感謝した。

大学の教員という世界に関心を持ったのは岡田先生の影響であり、現在、私が大学教員として働いているのは岡田先生と出会ったからである。

今となっては、岡田先生と同じ職場で働けたこと、ゴルフと一緒に行ったこと、『商業概論』が共著で書けたことが私にとっては素晴らしい思い出になった。ただ、魚釣りには行けなかったことが少し残念です。

最後に、岡田先生、ありがとうございました。そして、岡田先生、安らかにお眠りください。

## 註

- 1) 五箇荘地区の寺子屋に関しては、以下の文献を参考にしている。

中野 正堂 著 『近江商人の魂を育てた寺子屋』 法蔵館 2020年

なお、この文献に関しては、五箇荘地区での寺子屋に関する資料を丁寧に分析され、長年研究された成果からできている素晴らしい文献である。

- 2) 日野地区では、明治38年に日野町立日野裁縫学校が設立され、大正3年に日野町立日野実科高等女子高校として改称し、大正11年には滋賀県立日野高等女学校に昇格している。しかし、日野地区では、私立の学校ではなく、町立として開校されている点が異なることから、今回は本稿では取り上げていない。

滋賀県立日野高等女学校（現在の滋賀県立日野高等学校）に関しては、今後詳しく調査することとする。

- 3) 塚本さとに関しては、近江商人博物館にて、2001年に秋季特別企画展として「ある近江商人の妻 塚本さとの生涯」が行われている。以下が、その時にまとめられた資料である。

近江商人博物館 編 『ある近江商人の妻 塚本さとの生涯』 近江商人博物館 2001年

この原稿では、この資料を参考としている部分が多い。

なお、私立学校はそれぞれ「建学の精神」に基づいた、各校特色ある教育が行われていることも特徴の一つであることはよく知られている。その部分を考えると、やはり、塚本さとが、私財を投げ出してまで、私立淡海女子実学校を開校した本当の理由を知ることが今後の課題であろう。

## 参考文献

- 木村・江竜・西川 編 『近江人物伝』 臨川書店 1976年  
邦光史郎 著 『近江商人』 日本経済新聞社 1977年  
近江商人博物館 編 『藤井善助と有鄰館』 近江商人博物館 1999年  
AKINDO委員会 編 『近江商人のふるさとを歩く』 サンライズ出版 2000年  
近江商人博物館 編 『和算と算盤』 近江商人博物館 2000年。  
近江商人博物館 編 『近江商人の里と中山道』 近江商人博物館 2002年  
近江商人博物館 編 『近江商人物語』 近江商人博物館 2002年  
五箇荘町・五箇荘町観光協会 編 『きてみて五箇荘』 サンライズ出版 2002年  
サンライズ出版 編 『近江商人に学ぶ』 サンライズ出版 2003年  
近江商人博物館 編 『商家の家訓』 近江商人博物館 2003年  
末永 國紀 著 『近江商人学入門』 サンライズ出版 2004年  
NPO法人三方よし研究所 編 『近江の商人屋敷と旧街道』 サンライズ出版 2005年  
NPO法人三方よし研究所 編 『近江商人ものしり帖』 サンライズ出版 2008年  
(財)藤井協成会 編 『藤井家 家訓』 (財)藤井協成会 2009年  
NPO法人三方よし研究所 編 『Q&Aでわかる近江商人』 サンライズ出版 2010年  
松本 宏 編 『近江日野商人の研究』 日本経済評論社 2010年  
末永 國紀 著 『近江商人 三方よし経営に学ぶ』 ミネルヴァ書房 2011年  
童門 冬二 著 『近江商人のビジネス哲学』 サンライズ出版 2012年  
末永 ラーリ・G 編 『The Story of Japan's Ohmi Merchants』 出版文化産業振興財団 2019年  
中野 正堂 著 『近江商人の魂を育てた寺子屋』 法蔵館 2020年  
小倉栄一郎 著 『近江商人に理念 増補版』 サンライズ出版 2020年  
窪田和美 著 『近江商人の生活態度』 法蔵館 2020年